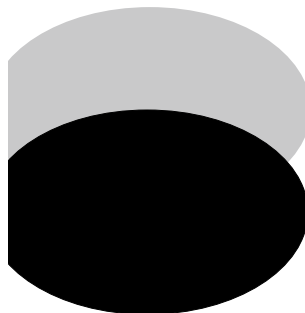


2010612

絵本学会 NEWS No.39

発行：絵本学会
発行日：2010年6月12日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒567-8578 茨木市宿久庄2丁目19-5
梅花女子大学児童文学科 香曾我部秀幸研究室内
E-mail:ehon-g@baika.ac.jp
http://www.u-gakugei.ac.jp/~ehon/index.html



新年度にあたって 中川素子
絵本学会第13回総会
絵本研究会開催のお知らせ
研究紀要『絵本学』投稿論文募集のお知らせ
委員会から
事務局からのお知らせ
インフォメーション-絵本関係展覧会・イベント
〈読書の亀〉 竹内通雅
ガクセイ Interview-1〈駒形克己〉

絵本学会

新年度にあたって 中川素子

2009年6月より新理事会になり、この6月でちょうど1年となる。私たちは、絵本学会はどうあるべきかという問題を中心に据えながら、具体的な課題をこなしてきた。いくつかの課題が浮き彫りになったが、新しい取り組みもなされ、また今後の学会発展への道筋が見えた1年でもある。ここでは、2009年の活動報告、2010年の活動案と分けずに、書かせていただく。

学会の大きな仕事としては、研究を深めること、絵本を広めること、異なる研究領域の交流の三つであろうか。具体的には、大会実行委員会による年に1回の大会開催、紀要委員会による紀要『絵本学』の発行と当該年度に出版された文献のまとめ、機関誌編集委員会による『絵本ブックエンド』の編集と発行、研究委員会による研究会開催と会員のための研究助成決定、企画委員会によるフォーラム開催、広報委員会による年に3回のニュース発行とホームページ運営、それらを確実に支えてくれている事務局の仕事とである。

この5月にフェリス学院大学で第13回絵本学会大会が行われた。実行委員長の藤本朝巳さんの心配りと魅力的な講演者陣、会員たちの質の高い研究発表、長野ヒデ子さんの原画展と大塚敦子さんの写真展などで、とても充実した大会となった。ただ、問題点もあり、口頭発表と作品発表の二本立てのスケジュールだと、1日半という日程ではどうしても時間が重なってしまう。どちらかという作品発表が軽んじられる傾向にあり、次回からの考慮が必要かと思われる。尚、来年度開催校は東京の大正大学に決定し、斬新な企画が生まれるのではと期待している。

紀要『絵本学』第12号には11編の投稿があり、査読の結果6編が採択された。不採択となったものは、査読者の講評により論の偏りなどに気づいていただけるのではと思う。書き直してぜひ再度の投稿を期待したい。また当該年度の出版物資料を、永田桂子さんと丸尾美保さんが地道な調査でまとめてくださっている。もらす文献・資料などが無いよう、皆様からの情報もぜひお願い

したい。機関誌『絵本ブックエンド』は、毎春、出版されていたが、今年は編集委員長が大会実行委員長も兼ねていたため、無理をせず秋に出版することをお願いした。もう少しお待ちいただければと思う。研究委員会では年に1度、「絵本研究の方法」で研究会を開催している。研究領域が何であれ、どなたにも関係するテーマで、昨年の吉田新一さんの講演には多くの参加者があり、講演後のグループワークも盛んであった。企画委員会では、講演者の話をきく形ではなく、参加者が主体的に絵本作りを行うフォーラムに切り替えている。昨年は札幌の藤女子大学で松岡和義さんの講演と、和田直人さん・山田小百合さんによる絵本制作ワークショップが行われ、多数の参加者があった。今年度は10月に札幌の藤女子大学花川校舎で、また10月以降に時期、内容とも未定であるが、山形で行うことになっている。参加者同士のコミュニケーションも期待できるのではないだろうか。広報委員会ではニュースを単なる情報としてだけでなく、現場からの生きた声を聞けるように、作家や絵本作家などのリレーエッセイを新しく企画した。第1回は上笙一郎さんで、このコラムは好評を得ているようだ。

絵本学会 NEWS37号で、私は会長就任挨拶として会員をふやしたいと書いた。この1年で40名の方が入会したが、32名の方が退会された。差し引き8名の増員のみだが、僅かでも増えたのはうれしい。それにチャーム的な長野ヒデ子さんが理事に就任され、元気に活躍されているので、他の絵本作家たちの学会に対する関心も深まっているようだ。ただ未来の学会を背負って立つ学生会員が3名しかいない。理事会を通じた考えでない事をお断りしておくが、若い方も取り組みやすいパネル発表の場を作ったり、東京都写真美術館での三学会合同シンポジウム、2001年の第4回大会、2002年の第5回大会の時のように、学生の絵本作品を展示するなど、入会する魅力を作り出す必要があるようだ。また、学会賞なども作ってもよいかもしれない。これからは会員皆様の力を活かすことができればと考えている。

絵本学会第13回総会

日時：2010年5月3日(月) 17:00-18:00

会場：フェリス女学院大学

議長：石井光恵 書記：今田由香

出席者数：63名、委任状提出者数 75名

●開会の辞

香曾我部秀幸事務局長より開会の辞が述べられた。

議長・書記選出

議長に石井光恵氏、書記に今田由香氏が選出された。

●会長挨拶

中川素子会長より、第13回定期総会開催にあたり、挨拶が述べられた。

●●

●絵本学会 2009年度活動報告

中川素子会長より 2009年度活動報告(案)に基づき下記のような2009年度活動報告がなされ、承認された。

◎第12回絵本学会大会の開催

2009年6月27日(土)、28日(日)

京都女子大学(京都市東山区)

テーマ：「絵本と子育て」 参加者 のべ600名(2日間)

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラムの開催 2010年1月31日(日) 藤女子大学 北16条校舎(札幌市)

テーマ：「絵本—つくることから考える」 参加者 71名

◎紀要委員会の活動

- ・絵本学会研究紀要『絵本学』第12号の刊行
- ・2009年度絵本参考文献目録(08年9月～09年8月)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

- ・機関誌『絵本BOOK END 2009』の刊行
- ・機関誌『絵本BOOK END 2010』の発行準備

◎研究委員会の活動

・研究会の開催 2009年11月7日(土) 日本女子大学目白キャンパス 百年館201

テーマ：「絵本研究の方法」 参加者 46名

- ・絵本研究助成(1件、3万円)

「戦後絵本史におけるこぐま社の絵本研究」(「こぐま社の絵本研究」 代表者 廣田真智子)

・研究会報告冊子『戦後の保育絵本を語る—『キンダーブック』『ひかりのくに』を中心に—』の発行(2008年度)

◎広報委員会の活動

・『絵本学会NEWS』の発行 36号(5月)、37号(10月)、38号(2月)

- ・HPの管理運営

◎他学会等との連携

子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学学会、日本マンガ学会等との連携推進

◎入退会

新入会者 40名 退会者 32名(除籍者を含む)

◎絵本学会紀要『絵本学』の抜き刷有料化について

石井紀要委員長より、抜き刷有料化に伴い、ホームページの執筆要項が従来そのままであったため、一部混乱を招いたお詫びと、ホームページを至急修正する旨の報告があった。抜き刷有料化は、昨年の決定通り第12号から行うことも併せて報告された。

●2009年度決算・会計監査報告

香曾我部秀幸事務局長より、資料「2009年度決算案」に基づき、会計報告がなされた。監査担当の佐々木宏子氏より、監査の結果適正と認める旨、報告された。審議の結果2009年度決算報告が承認された。

●●

●2010年度活動計画について

◎第13回絵本学会大会の開催

2010年5月3日(月・祝)、4日(火・祝) フェリス女学院大学 緑園校舎

テーマ：「絵・ことば・音」

◎企画委員会の活動

- ・絵本フォーラムの開催

◎紀要編集委員会の活動

- ・絵本学会研究紀要『絵本学』第13号の刊行
- ・2010年度絵本参考文献目録(09年9月～10年8月)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

- ・機関誌『絵本BOOK END 2010』の刊行
- ・機関誌『絵本BOOK END 2011』の発行準備

◎研究委員会の活動

- ・研究会の開催
- ・絵本研究助成(2件、各3万円)

◎広報委員会の活動

- ・『絵本学会NEWS』の発行(年3回の予定)
- ・HPの管理運営

◎他学会等との連携

子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学学会、日本マンガ学会等との連携推進

●2010年度予算案について

香曾我部秀幸事務局長より、資料「2010年度決算案」に基づき、説明がなされた。審議の結果、原案通り承認された。

●閉会の辞

石井光恵議長より閉会の辞が述べられた。

絵本学会 2009年度収支 決算

2009年4月1日～2010年3月31日

科目	予算額	決算	増減	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	3,360,000	3,196,000	164,000	
賛助会員	280,000	300,000	-20,000	20,000×15口(現在13団体)
正会員	3,040,000	2,888,000	152,000	8,000×361名 (のべ人数)
準会員	40,000	8,000	32,000	4,000×2名
②事業収入	200,000	248,200	-48,200	
研究活動事業収入	50,000	103,000	-53,000	
フォーラム収入	50,000	94,000	-44,000	入場者収入
研究講座収入	0	9,000	-9,000	参加費収入
出版事業収入	150,000	145,200	4,800	『絵本BOOK END 2009』他
③雑収入	171,000	110,638	60,362	
受取利息収入	1000	338	662	
入会金収入	70,000	80,000	-10,000	入会金2000×40名
雑収入	100,000	30,300	69,700	出版物在庫販売など
事業活動収入合計	3,731,000	3,554,838	176,162	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	1,920,000	2,162,211	-242,211	
人件費支出	300,000	330,000	-30,000	
事務局報酬支出	300,000	330,000	-30,000	事務局賃金等
事業費支出	1,620,000	1,832,211	-212,211	
消耗品費支出	30,000	42,792	-12,792	事務消耗品費(プリンター等)
印刷製本費支出	790,000	721,371	68,629	
絵本学会ニュース	250,000	190,071	59,929	36、37、38号
研究紀要	450,000	441,000	9,000	『絵本学』11号
会員名簿	0	0	0	
その他	90,000	90,300	-300	封筒印刷
通信運搬費支出	350,000	234,869	115,131	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	350,000	492,730	-142,730	理事旅費等
会議費支出	30,000	25,609	4,391	
広告費支出	500,000	300,000	200,000	
印刷物制作費支出	20,000	0	20,000	
HP更新作業費支出	30,000	30,000	0	
雑支出	20,000	14,840	5,160	振込手数料他
②活動費支出	610,000	598,242	11,758	
大会運営補助金支出	250,000	250,000	0	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	300,000	318,242	-18,242	
企画委員会	100,000	188,861	-88,861	フォーラム等
紀要編集委員会	50,000	15,810	34,190	紀要編集等
機関誌編集委員会	50,000	30,657	19,343	『絵本BOOK END 2010』編集
研究委員会	50,000	43,634	6,366	研究会主催
広報委員会	50,000	39,280	10,720	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	60,000	30,000	30,000	3万円×1
③出版事業支出	1,200,000	1,208,025	-8,025	『絵本BOOK END 2009』発行
編集作業費支出	200,000	269,325	-69,325	
制作費支出	1,000,000	938,700	61,300	
事業活動支出合計	3,730,000	3,968,478	-238,478	
事業活動収支差額	1,000	-413,640	414,640	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
投資活動収入計	0	0	0	
2. 投資活動支出				
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
III 財務活動の部				
1. 財務活動				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
	200,000	0	200,000	
当期収支差額	-199,000	-413,640	129,206	
前期繰越収支差額	2,895,455	2,895,455	0	
次期繰越収支差額	2,696,455	2,481,815	214,640	

絵本学会 2010年度収支予算

2010年4月1日～2011年3月31日

科目	予算額	前年予算額	増減(予一決)	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	3,540,000	3,360,000	180,000	
賛助会員	300,000	280,000	20,000	20,000×15口(現在13団体)
正会員	3,200,000	3,040,000	160,000	8,000×400名(現在約420名)
準会員	40,000	40,000	0	4,000×10名
②事業収入	200,000	200,000	0	
研究活動事業収入	50,000	50,000	0	
フォーラム収入	40,000	50,000	-10,000	入場者収入
研究講座収入	10,000	0	10,000	参加費収入
出版事業収入	150,000	150,000	0	『絵本BOOK END 2009』
③雑収入	130,500	171,000	-40,500	
受取利息収入	500	1000	-500	
入会金収入	80,000	70,000	10,000	入会金2,000×40名
雑収入	50,000	100,000	-50,000	出版物在庫販売など
事業活動収入合計	3,870,500	3,731,000	139,500	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,010,000	2,370,000	-360,000	
人件費支出	300,000	300,000	0	
事務局報酬支出	300,000	300,000	0	事務局賃金等
事業費支出	1,710,000	2,070,000	-360,000	
消耗品費支出	30,000	30,000	0	事務消耗品費
印刷製本費支出	800,000	790,000	10,000	
絵本学会ニュース	200,000	250,000	-50,000	39,40,41号
研究紀要	450,000	450,000	0	『絵本学』12号
会員名簿	100,000	0	100,000	2010年度発行予定
その他	50,000	90,000	-40,000	封筒等
通信運搬費支出	300,000	350,000	-50,000	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	500,000	350,000	150,000	理事旅費等(理事会4回/年)
会議費支出	10,000	30,000	-20,000	
広告費支出	500,000	500,000	0	
印刷物制作費支出	20,000	20,000	0	
HP更新作業費支出	30,000	30,000	0	
雑支出	20,000	20,000	0	振込手数料等
②活動費支出	720,000	610,000	110,000	
大会運営補助金支出	300,000	250,000	50,000	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	360,000	300,000	60,000	
企画委員会	150,000	100,000	50,000	フォーラム等
紀要編集委員会	50,000	50,000	0	紀要編集等
機関誌編集委員会	50,000	50,000	0	『絵本BOOK END』編集
研究委員会	60,000	50,000	10,000	研究会主催
広報委員会	50,000	50,000	0	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	60,000	60,000	0	2団体
	0	0	0	
③出版事業支出	1,200,000	1,200,000	0	『絵本BOOK END 2010』
編集作業費支出	200,000	200,000	0	
制作費支出	1,000,000	1,000,000	0	
事業活動支出合計	3,930,000	4,180,000	-250,000	
事業活動収支差額	-59,500	-449,000	389,500	

II 投資活動収支の部

1. 投資活動収入

10周年事業資産金取崩収入	1,163,280	0	1,163,280
投資活動収入計	1,163,280	0	1,163,280

2. 投資活動支出

10周年事業積立資産支出	0	0	0
投資活動支出計	0	0	0
投資活動収支差額	1,163,280	0	1,163,280

III 財務活動の部

1. 財務活動収入

長期借入金収入	0	0	0
財務活動収入計	0	0	0

2. 財務活動支出

長期借入金返済支出	0	0	0
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0

IV 予備費支出

	200,000	200,000	0
--	---------	---------	---

当期収支差額	903,780	-649,000	1,552,780
前期繰越収支差額	2,751,815	2,895,455	-143,640
次期繰越収支差額	3,655,595	2,246,455	1,409,140

絵本学会 財産目録

2010年3月31日現在

科目	金額	
I 資産の部		
1. 流動資産		
現金預金		
現金手元有高	67,021	
普通預金 りそな銀行高槻支店	966,352	
定額貯金 高槻天王郵便局	2,000,000	
絵本学会振替口座	631,722	
次年度仮払金 (大会運営補助金)	250,000	
流動資産合計		3,915,095
II 負債の部		
1. 流動負債		
流動負債合計	0	
負債合計		0
正味資産合計		3,915,095

注記：10周年事業積立預金*	1,163,280
次年度繰越金	2,751,815
計	<u>3,915,095</u>

絵本研究会開催のお知らせ
テーマ: 絵本研究の方法 絵本の構造論

講師: 中川素子
ゲストスピーカー: バーサンスレン・ボロルマー(絵本作家)
日時: 2010年10月9日(土) 13時30分～
会場: 日本女子大学
主催: 絵本学会研究委員会

2010年度研究会を10月9日(土)に開催します。テーマは昨年引き続き「絵本研究の方法」です。絵本が語るのは物語だけではなく。絵本で何を見せるのか、どう見せるのか、素材、展開の仕方、描き方などに注目すると、絵本作家たちのさまざまな表現に気づきます。第1部では中川素子絵本学会会長が、絵本の構造論について講演します。第2部は参加者全員で研究方法について話し合い、情報交換をするグループワークです。みなさまの参加をお待ちしています。

日時: 2010年10月9日(土)
第1部 講演「絵本の構造論」13:30～15:00
第2部 グループワーク「絵本研究の方法」15:10～16:50
場所: 日本女子大学(目白キャンパス)
※詳細は参加受付後に発送する参加証に記載します。
定員: 50名(申込み順)
参加費: 会員・学生 無料/非会員 1000円

申込み方法: 往復葉書の往信面に①～④の該当項目を、返信宛名にご自身の住所と氏名を書いて下記に送付してください。

- ①氏名(会員か非会員、学生は学校名を明記)
- ②連絡先(住所+メールアドレス等)
- ③参加するプログラム
(「第1部のみ」または「第1部+第2部」を明記)
- ④第2部に参加の方のみ「ご自身の研究テーマ(予定でも可)」と「グループワークで話し合いたいこと」を記入。

送付先: 〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学 家政学部児童学科 今田由香宛
申込締め切り: 2010年9月29日(水)(定員50名・申し込み順)
研究委員 永田桂子、大橋真由美、今田由香

絵本学会研究紀要『絵本学』第13号
投稿論文募集のお知らせ

絵本学会研究紀要『絵本学』第13号への投稿論文を、下記要領で募集します。ふるってご応募ください。

なお、執筆要領には別に詳細がありますので、投稿希望者は、事務局に請求するか、ホームページを参照のうえ、それに従って原稿を作成してください。

●絵本学会研究紀要『絵本学』投稿規定

- ◎投稿資格: 絵本学会会員および準会員
- ◎内容: 絵本に関する研究論文、研究ノート、論説、報告で、未発表のもの。
- 【研究論文】は、研究の視点や手法、理論展開及び結論にオリジナリティや説得力が高く認められるもの
- 【研究ノート】は、研究の基礎データになる資料、あるいは理論構築の可能性が認められるもの。
- 【論説】は、学術的な論で、注目すべき研究・作品・作家・展覧会・

活動を取り上げての評論など。

【報告】は、活動紹介や文献紹介など。

◎掲載採択: 査読に基づき、編集委員が掲載の採否を決定する。必要に応じて編集委員の外に査読委員を依頼する場合がある。採否判定の過程・理由は開示しない。ただし、投稿者は、結果について説明を求めることができる。この場合、編集委員会は申し出内容を精査の上、適正範囲内で回答する。

◎執筆要領: 執筆は別に定める執筆要項に従うこと。

◎投稿締切: 2010年9月30日(木)(必着)

◎掲載採択通知: 2010年12月15日(水)までに投稿者へ通知する。

◎刊行: 2010年度内

◎原稿送付先: 絵本学会事務局(郵送とする。FAX、電子メールなどによる送付は不可)

企画委員会からのお知らせ

●2010年 絵本フォーラム

テーマ:タイトルは未定ですが、識字教育に関わっている方たちと、絵本と文字・文を読むということのつながりを話し合います。

日時 2010年10月9日(土) 13:00~14:30

場所 藤女子大学花川校舎
石狩市花川南4条5丁目
0133-74-7431(杉浦研)

シンポジウム

話題提供者 乾淑子(東海大学)

工藤(遠友塾)

柴村紀代(藤女子大学)

コーディネーター

杉浦 篤子(藤女子大学)

研究委員会からのお知らせ

2010年度の絵本研究に関する研究会などグループの活動を助成します。助成金は、一件あたり30,000円とし、2010年度は2件について助成します。助成を希望するグループは、研究テーマ・研究の概要・研究代表者および構成員・発表の形態を明記し、2010年7月12日(月)までに(必着)絵本学会事務局宛に郵送してください。結果は、研究委員会が審査し理事会での承認を得た上でお知らせします。

広報委員会からのお知らせ

広報委員会では、会員の学生を中心に絵本づくりの現場を訪れ、作家や編集者にインタビューをする新企画「ガクセイ Interview」を試みました。第1回は、駒形克己さんを訪ね、取材から原稿づくり、6ページのデザインすべてを学生が担当しました。

今回は、東京学芸大学と武蔵野美術大学の学生によって行われましたが、今後は、会員である他大学の学生にもひろげていきたいと考えています。教員のサポートによる活動も歓迎します。詳細については広報委員下記アドレスにお問い合わせください。

また、37号でもご案内しましたが、会員の所属するさまざまな組織、団体など、現場からの活動レポートを募集し、『絵本学会 NEWS』や絵本学会のウェブ・サイトに随時掲載していく予定です。『絵本学会 NEWS』は、年3回の発行になりますので、すべてのご要望に応えることはできませんが、ウェブ・サイトに掲載するなど、会員情報の充実を計っていこうと考えています。

問い合わせ・申込先:絵本学会広報委員会 今井まで、下記メールアドレスにお問い合わせください。

E-mail: imai@musabi.ac.jp

事務局からのお知らせ

第4回 絵本学会理事会 議事録

日時:2010年3月23日(火) 13:30-16:30

会場:日本女子大学 新泉館4階 児童学科会議室

出席者:中川素子(会長)、香曾我部秀幸(事務局長)、石井光恵、今井良朗、今田由香、永田桂子、長野ヒデ子、藤本朝巳

欠席者:大橋真由美、杉浦篤子

議長:中川会長

○報告事項

1. 第3回理事会議事録の確認

2. 第13回絵本学会大会の準備について(藤本大会実行委員長) 研究発表、作品発表プログラムを500部印刷し、大会に参加されない会員にも後日送付する。

神奈川県教育委員会、横浜市芸術文化振興財団の後援が決定した。

会期中、校内で情報センターのシステムチェックがあるため、インターネットが使用できないが、事前に申し出があれば準備ができる。長野ヒデ子絵本原画展、大塚敦子写真展を行う。展示について、JBBYの攪上氏よりバリアフリー関連の資料貸出に関する情報をいただいたが、予算の関係で断念した。

書籍の販売は、横浜こどものとも社に依頼をし、学会の紀要やブックエンドも委託販売する。

個人での書籍の販売スペースや、ちらし、見本を置く場を提供する。理事等関係者の宿泊先〜エクセルホテル東急(横浜駅前) 藤本委員長より宿泊予約する。

プログラム等に「フェリス女学院大学創立140周年記念事業」という表記を入れる旨提案があり、承認された。

3. 各委員会報告

①紀要委員会

紀要の掲載順について、論文と研究ノートに分け、原稿受理順か、執筆者名の五十音順に並べるか検討し、次回理事会にて報告する。6月発行を予定している。

紀要の字数制限は、研究論文の場合1万6千字となっているが、レイアウトの関係で実際には1万5千字しか入らないため、最大字数制限は1万5千字とし、執筆要項を改正することが承認された。

ページ数については、研究論文は4~8頁(文字数にして7000字~15000字)、研究ノートは4~6頁(文字数にして7000字~11000字)、論説は4頁(文字数にして7000字)以内、報告は4頁(文字数にして7000字)以内とすることになった。

これまでは投稿の際にデータの提出を義務付けていたが、次回からは採択が決まった時点での提出に改正する。また、データはFDもしくはCD-Rでの提出を求めていたが、DVD、フラッシュメモリーも加えることとなった。

注と参考文献の書き方について検討した結果、従来通り、執筆要項の規定通りの表記に統一させることを確認した。

②研究委員会

2010年度は今田理事が担当、「絵本研究の方法、絵本構造論」をテーマとし、中川会長に講師を依頼。ゲストにバーサンスレン・ポロルマーさん(モンゴル・絵本作家)を招待する。

参加費について、会員と学生は無料、非会員は1000円と設定。

6月のNEWS発行時にちらしを同封し、ホームページにも掲載する。

3年間のまとめとして報告集の作成を検討しているが、コストを抑えることが今後の課題。

また、一回毎に簡単な報告をNEWSに掲載する。最終的なまとめを紀要に「報告」という形で掲載することなども検討する。

研究助成については、総会で予算を提案した後、6月のNEWSで募集する。

③広報委員会

次号NEWS 6月号に、リレーエッセイと学生が取材した記事を入れ、内容の充実を図る。

今後のNEWSの発行時期を、5月(大会のお知らせ、会費納入のお知らせ)、10月(大会報告)、2月(大会での研究・作品発表の募集)とする。

各委員会からの報告も、掲載する。

④機関誌編集委員会

「絵本ワークショップ」のコーナーを、創作現場がわかるような記事を掲載するか、今後の検討課題とする。

9月発行を目指し、10月のNEWS発行と同時に発送する。

⑤企画委員会(杉浦委員長欠席のため、事務局代理報告)

2010年度フォーラムは9月26日(日)に札幌市での開催を予定、9月24日～30日に東海大学主催で札幌市の紀伊国屋ホールにて長野ヒデ子さん原画展が開催されるため、それに合わせて計画中有る。

(4月6日付メールにて、杉浦委員長より連絡あり。次回理事会後、企画委員会が開かれ、

今後の計画が決定される予定。)

○審議事項

1. 会員の入退会の承認(敬称略)

入会者: 福田きよみ、高瀬陽子、鈴木隆史、深田智、あわやまり、水谷亜由美、内海裕美、赤木さゆり、矢浦有里絵

退会者: 尾崎健夫、澤田暢、高木和美、高田宏三、竹内千代子

2. 紀要の抜き刷り有料化について(紀要編集委員長)

・紀要の抜き刷りは今回から有料化とするが、ホームページに新しい執筆要項が更新されていなかったため、執筆者の方々に紀要編集委員よりお詫びのご挨拶をお送りする。

3. 第13回絵本学会大会定期総会議案について(別紙)

1) 2009年度活動報告

・総会当日、2009年度活動報告として、全体の報告は中川会長から、各委員会の報告は各委員長から報告する。

2) 2009年度決算案

・フォーラム収入、研究講座収入の欄を設け、独立採算ではない形式をとる。

・各委員会費は、次年度より年度初めに予算額を各委員長の口座に振込み、余った額は年度末に事務局へ返金することとし、各委員会の会計は収支決算の形で報告することが承認された。

・3月末日までに各専門委員会は、2009年度の収支報告書に全ての領収書を添えて事務局に郵送していただきたい旨、事務局より依頼があり、承認された。

3) 2010年度活動計画書

・総会当日、活動計画は中川会長から報告する。

4) 2010年度予算案

・次年度大会運営補助金支出を5万円増額して30万円とし、研究委員会を1万円増額して6万円とすることが承認された。

4. その他(中川会長)

絵本学会主催の大会・研究会等の内容の他誌への掲載許諾について。事前に事務局まで許諾の連絡をいただければ、情報を把握する側としてはありがたいが、義務付けるとかえって自由がきかなくなるのではないかといった意見が出され、結局良識に任せるしかないことが確認された。一方、万が一、中傷されるような記事が掲載された場合、事前連絡の有無にかかわらず、抗議の申し入れはすべきであることが確認された。また、絵本学会関連の情報を、公式に取材があり掲載された場合、その献本は当然要求することが確認された。緊急に決議を要する案件がある場合に限り、理事全員に一斉メールを回して議論し、後日委任状を事務局に提出する形式をとり、決議する場合があることが承認された。

次回理事会は、5月4日10時よりフェリス女学院にて行う。

2010年度 第1回 絵本学会理事会 議事録

日時: 2010年5月3日(土) 10:00-12:00

会場: フェリス女学院大学 7号館2階文学部共同研究室(大会本部)

出席者: 中川素子(会長)、香曾我部秀幸(事務局長)、石井光恵、

今井良朗、今田由香、杉浦篤子、永田桂子、長野ヒデ子、藤本朝巴

欠席者: 大橋真由美

議長: 中川会長

○報告事項

1. 前年度第4回理事会議事録の確認

2. 各委員会報告

①紀要委員会

抜き刷りを希望する執筆者には、出版社に直接費用を振込等で支払うようお願いすることが確認された。

次号NEWSに同封する。

②研究委員会

今年度の絵本研究会は10月9日、日本女子大学にて開催する。

講師は中川素子氏(会長)、グループワークで絵本の研究の方法と絵本構造論を学ぶ。

チラシを次号NEWSに同封する。

③広報委員会

次号NEWSは6月初旬発送予定。

学生たちが駒形克己さんのアトリエを訪問し、取材を終え、次号NEWSに掲載する。

次号NEWSには竹内通雅さんにリレーを担当していただいた。

その他、各委員会・事務局からのお知らせ、および総会の報告を掲載する。

④企画委員会

昨年度フォーラムの報告と、今年度の計画が報告された。

⑤機関誌編集委員会

『ブックエンド』の発行について

機関誌の存在意義と性格を再度確認する必要がある。

現在編集の次号では、新連載の記事があるので、継続することが理想的である。

毎年刊行するのは予算的、労力的に難しいのではないだろうか。

機関誌の内容を充実させるためには、会員、非会員に限らず、執筆者に原稿料を支払うべきではないだろうか。

学生の編集企画作業への参加が、機関誌の内容の充実につながるのではないだろうか。などの意見が挙がり、継続審議事項として今後の理事会で検討することが確認された。

○審議事項

1. 第13回大会総会議案の承認

2. 各専門委員会の活動費について

今年度は各委員会の活動費を事前に各委員長に渡し、それぞれで収支決算をする。残った費用は年度末に事務局へ戻すことが決定された。

3. 会員の入退会の承認(敬称略)

入会者: 徳永満理、岩田英作、山下紗織、桂まに子、マユーあき

退会者: 谷暎子、山村伊津子

退会者(会費未納者): 岡本綾、香川明美、小久保明子、桜井翠、佐野由美子、田中稔美、直江博子、藤川朝苗、降旗千賀子、矢谷芳子

4. 次年度大会開催地について

理事会の時点で、開催候補地が未定のため、総会および懇親会等で、立候補を呼び掛けることとなった。

(その結果、大正大学(担当会員 Werner Schaumann氏)が候補に挙がり、5月9日～13日にかけて、書面による臨時理事会において、決定・承認された。)

●寄贈図書のお知らせ

2009年5月～2010年5月の間に、以下の図書が絵本学会に寄贈されましたのでお知らせします。(到着順)

軽井沢絵本の森美術館より

『2009年春の企画展 現代ヨーロッパの絵本展～地域色豊かな絵本表現～』(軽井沢絵本の森美術館 2009) 35p.

★ 国立国会図書館 国際子ども図書館より

『国際子ども図書館』第10号(国立国会図書館 国際子ども図書館 2010.3.) 54p.

★ カスチャールの会より

『カスチャール』第27号(「カスチャール」編集部 2009.12) 128p.

生活書院より

三島亜紀子(文) みしまえつこ(絵) 平下耕三(監修)『妖怪バリエーションをやっつけろ!』(生活書院 2010.4)

絵本関係展覧会・イベント
Information

●世田谷文学館

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 1-10-10
03-5374-9111, 03-5374-9120 (Fax)

<http://www.setabun.or.jp/>

【常設展】文学に描かれた世田谷 100 年の物語

【企画展】星新一展

10.4.29 (木) -6.27 (日)

●絵本美術館&コテージ 森のおうち

〒399-8301 長野県安曇野市穂高有明 2215-9
0263-83-5670, 0263-83-5885 (Fax)

<http://www.morinoouchi.com/index.html>

【企画展】アフリカの鼓動 絵本原画展

10.5.21 (金) -7.13 (火)

【企画展】長編ファンタジーの表紙絵展

10.5.21 (金) -7.13 (火)

●祈りの丘絵本美術館 (童話館グループ)

〒850-0391 長崎県長崎市南山手町 2-10
095-828-0716

<http://www.douwakan.co.jp/museum>

【企画展】長谷川集平 サルコーデ・ナガサキ

10.5.25 (火) -8.29 (日)

【常設展】大道あやコレクション 生きとし生けるものへの賛歌

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原
0261-62-0772, 0261-62-0774 (Fax)

<http://www.chihiro.jp/azumino/>

【展示】ちひろ野の花のささやき

10.5.14 (金) -7.13 (火)

【企画展】2000 年代の日本の絵本展 2000 - 2009

10.5.14 (金) -7.13 (火)

田島征三『オオカミのおうさま』(偕成社)より 2009年



●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井 4-7-2
03-3995-0612, 03-3995-0680 (Fax)

<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

【展示】ちひろの雨

10.5.12 (水) -7.11 (日)

【企画展】生誕 100 年 赤羽末吉展 I -絵本は舞台だ-

10.5.12 (水) -7.11 (日)

●国立国会図書館 国際子ども図書館

〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49

03-3827-2053 (代表), 03-3827-2069 (音声案内)
03-3827-2043 (Fax)

<http://www.kodomo.go.jp/index.jsp>

【企画展】日本発☆子どもの本、海を渡る

10.2.20(土)-10.9.5 (日)

●軽井沢 絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町風越公園 182
0267-48-3340, 0267-48-2006 (Fax)

<http://www.museen.org/ehon/index2.html>

【企画展】絵本のふるさと 歴史めぐり~ 19 世紀から現代までの
西洋絵本~

10.6.18 (金) -10.10.4 (月)

●刈谷市美術館

〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町 4-5
0566-23-1636, 0566-26-0511 (Fax)

<http://www.city.kariya.lg.jp/museum/index.html>

●木城えほんの郷

〒884-0104 宮崎県児湯郡木城町大字石河内 475
0983-39-1141, 0983-39-1180 (Fax)

<http://service.kijo.jp/~ehon/>

【展示】今森光彦写真展「昆虫ワンダーランド」

10.7.10 (土) -8.29 (日)

【展示】片山健の世界展

10.9.11 (土) -10.24 (日)

●射水市大島絵本館

〒939-0283 富山県射水市鳥取 50
0766-52-6780, 0766-52-6777 (Fax)

<http://www.ehonkan.or.jp/>

【展示】せなけいこ絵本原画展

10.5.29 (土) -7.29 (木)

【展示】アンパンマン絵本原画展

10.7.31 (土) -9.29 (水)

●イルフ童画館

〒 394-0027 長野県岡谷市中央町 2-2-1
0266-24-3319, 0266-21-1620 (Fax)
<http://www.ilf.jp/>

【展示】 武井武雄 1920年代の線描画
10.4.23 (金) -6.29 (火)

【展示】 リサとガスパール & ペネロペ展
10.4.23 (金) -6.29 (火)

●飛騨絵本美術館 ポレポレハウス

〒 506-0205 岐阜県高山市清見町夏蔵 713-23
0577-67-3347 (Tel, Fax)
<http://www.porepore-house.com/>

【常設展】 田島征三 原画常設展示 さよならぼろ
10.7.1 (木) -9.30 (金)

【特別企画展】 田島征三『はたけのカーニバル』原画展
10.4.16 (金) -6.30 (水)

【特別企画展】 まついのりこ『とんとんとん こんにちは』『ぶたちゃん りんごちゃん』原画展
10.7.1 (木) -9.30 (木)

●小さな絵本美術館 岡谷本館

〒 394-0081 長野県岡谷市長地権現 4-6-13
0266-28-9877, 0266-28-9866 (Fax)
<http://www.ba-ba.net/>

【企画展】 ヨゼフ・ラダ展
10.5.14 (金) -7.12 (月)

●小さな絵本美術館 八ヶ岳館

〒 391-0081 長野県諏訪郡原村原山
0266-75-3450, 0266-75-3460 (Fax)
【企画展】 エルンスト・クライドルフ展

10.5.14 (金) -7.12 (月)



エルンスト・クライドルフ『花のメルヘン』

●いわむらかずお絵本の丘美術館

〒 324 - 0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3097
0287-92-5514, 0287-92-1818 (Fax)
<http://ehonnooka.com/>

【企画展】 長野ヒデ子 / いわむらかずお絵本原画展
10.6.10 (木) -9.12 (日)

●安曇野絵本館

〒 399-8301 長野県安曇野市穂高有明 2186-117
0263-83-6173 (Tel, Fax)
<http://www.ehonkan.net/>

【企画展】 たしろちさと 絵本原画展
103.3 (水) -7.19 (月)

●板橋区立美術館

〒 175-0092 東京都板橋区赤塚 5-34-27
03-3979-3251, 03-3979-3252 (Fax)
<http://www.itabashiartmuseum.jp/art/index.html>

【企画展】 2010 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展
10.7.10 (土) -8.15 (日)

●安野光雅美術館

〒 699-5605 津和野町後田イ 60-1
0856-72-4155, 0856-72-4157 (Fax)
<http://www.town.tsuwano.lg.jp/anbi/anbi.html>

【企画展】 繪本 三国志
10.3.12 (金) -9.8 (水)

【企画展】 野の花と小人たち
10.3.12 (金) -9.8 (水)

【企画展】 風景と出会い
10.3.12 (金) -9.8 (水)



読書の亀

竹内 通雅



僕は読書が苦手です。

どうもすみません、ペコリっと頭を下げたい気分です。

曲がりなりに「絵本」という「本」を作るのが僕の仕事のひとつですが、本を読まない絵本が作れないというわけでもないので、別に謝罪するというのもおかしい話ですが、なんとなく後ろめたい感じなのです。

子供の頃から落ち着きがなく、集中力が持続しない。そうした性格の影響もあるのか、本を読み始めても長続きしたためしがありません。10分くらいで気が散り始めます。

それから、僕は活字を追いながら、その場面を脳裏に映像化しないと気が済まないのです。言葉を読みつつ、その文の意味する情景を逐一自分色に染め上げて行かなければ、前に進めないのです。

だから、時間がかかります。

そうこうしているうちに、自分で作り上げたイメージ像がむくむくもやもやとわき出してきて、読んでいる本の内容や主旨とは遥かかけ離れた空想の世界へトリップしているのです。

まるで妄想する亀の散歩だね。

そんなことの繰り返しが続くから、だいたい途中で心が折れてしまうのです。でも、いいんじゃないですかねえ、心なんていくらでも折れたりすれば。

そんなふうに「本」という物体を前にすると、蛭が縮むように気持ちが怯んでいましたが、マンガはよく読みましたね。月刊誌、週刊誌問わず大好きでした。あとテレビアニメも。

マンガには既に絵がついているのだから、頭の中で映像を組み立てる必要がなく、ストーリーに集中できるんですね。

じゃあ「絵本」もそうなのですか？ さて、それはわかりません。

では、僕が読書嫌いでも絵本を作ることができるのは、僕が絵を描けるからなのですか？ まあ、それはあまり関係のないことでしょう。

それよりも想像することや、妄想することの楽しさを知っていることのほうが大切のような気がします。あ、それからもちろん、いままでの様々な経験も重要だってことはいまでもありませんが、あんなことをした、こんなことを見た聞いた、ってというような経験値ですね。

確かに僕は読書が苦手でしたが、青年期にはけっこう読みましたよ。だって、本くらい読んでないと格好悪いしね。

それから当時の僕は、現代美術のカテゴリーで作品を発表していたから、理論武装の必要があったのです。理論武装には知識が必須で、知識を効率的に得るにはなんといってもそれは読書でした。

ジャック・デリダ、アラン・ジュフロワ、レヴィ=ストロース、メルロー=ポンティ、ロブ=グリエ、フォーコー、フッサール……ああ。

19～25歳の頃に実際に読んでいたのです。しかし、それで理論武装ができたかは記憶にございません。というより、理解しながら読んでいたのでしょうか？ 我ながら、今となっては甚だ疑問ですね。内容を解釈し記憶したかということより、ただそれらの「書物」を読んだ、という「思い出」だけが残っていたのです。

しかし相変わらず不器用な読み方ながら、併せて読んだいくつかの小説などは、今でも何かしらの糧になっているのかも知れません。

その中でも、レオ・レオーニの『平行植物』（工作舎）は極めつけでしたね。

読んでいるうちに、いつしかファンタジーが現実との境界線を越境し、まるでノンフィクションノベルを読んでいるような錯覚にとらわれたものです。

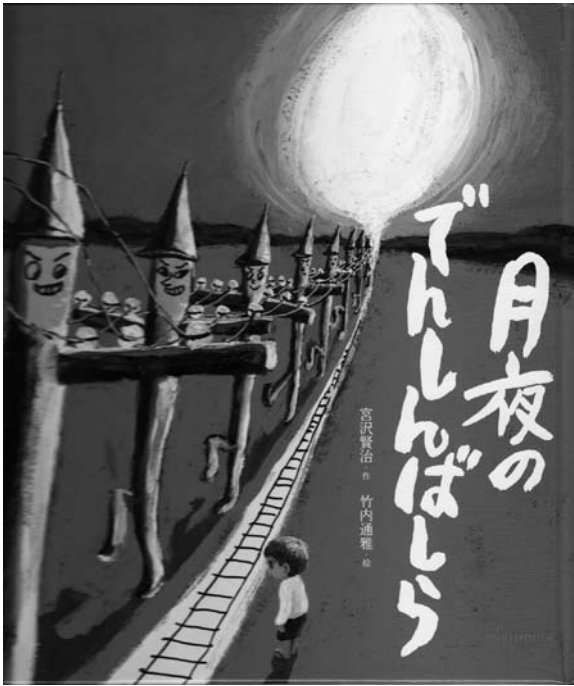
そうして現在に至り、僕は絵を描いたり、お話を書いて「絵本」という「本」を作る仕事をすることになりました。

『イチロくん』は、僕の最新作の絵本です。これはポプラ社（おとうさんだいきシリーズ）の3番目で、既に伊藤秀男さんと長谷川集平さんの作品が刊行されていました。

お二人とも周知のとおり、評価の定まった大ベテランですから、そのあとに続くには少しばかり気合が必要でした。

おとうさんが寝付けない子供に、いい加減なお話を聞かせるといふありふれた設定ですが、おとうさんの語る世界と、おとうさんと子供の会話のシーンとがパラレルに進行する構造になっています。

「平行絵本」でしょうか……。



「月夜のでんしんばしら」 さく・宮沢賢治 / 三起商行



竹内通雅

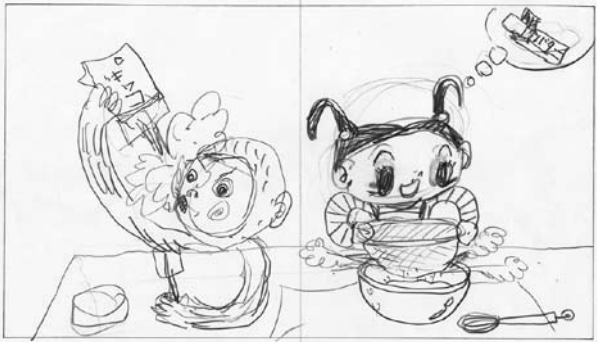
「イチロくん」 ポプラ社

「ミミと おとうさんの ハッピー・パースデー」 さく・石津ちひろ / 長崎出版のラフ画

① P2~3



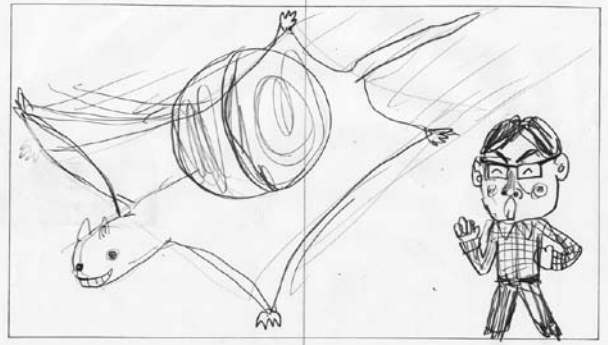
② P6~7



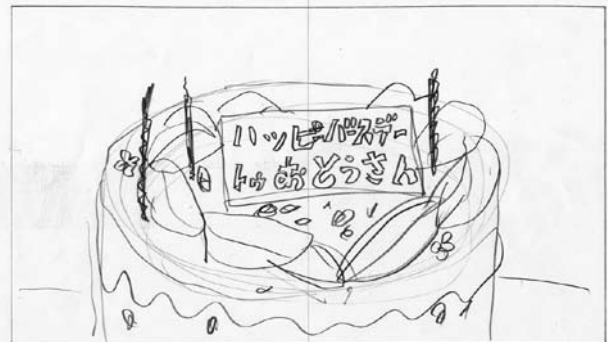
③ P18~19



④ P22~23



④ P28~29 リボンとらけびし?



⑤ P30~31



ガクセイ Interview ①

駒形 克己

学生たちが絵本づくりの現場を訪れ、作家にインタビューをする新企画「ガクセイ Interview」。第1回は駒形克己さん。グラフィックデザイナーとしての絵本づくりや、ワークショップについて興味深いお話を伺うことができました。

01 デザインの機能

世の中にあるもの、実は全部デザインが必要とされている。でもどうしてもデザインって経済効果の側面で語られる場面が多いから…。むしろ、小学生の頃から、社会とか算数とかと同じレベルでデザインの教科があってもいいと思うけど。そこまでいくには、もう少し頑張らないといけないね。

デザインの機能っていくつかあると思うけど、その中で特に大事なことは、まず「問題解決をする」ということ。モノを使う、伝える、という場面で「使いにくい」や「伝えにくい」とか色々な問題が起きる。それらをきちんと解決するのがデザイン。もうひとつには、人の心に作用する、ということ。それは「きれいだな」「いいなあ」といったような。常に「印象効果」を考え、例えば、どこかに行った時、情報全部は頭の中にインプットできないけれど、いい印象効果を得るとそれ自体は自由に持ち歩くことができる。そうした「印象効果」を作り出すために、デザインっていういろんな意味でスキルが求められている。そしてもうひとつには「新しい価値観を生み出す」こと。常に時代と共にあり、時に、半歩先行く気分が必要になる。これらの三つの大きな機能が、実は経済効果として活かされている。ファッションからプロダクト、色々なコミュニケーションの手段に至るまで。でも、もう一方で、経済効果の側面だけではなく、「社会性」—社会とヒトをつなぐとか、モノをつなぐとか、そんなところにもデザインの機能が発揮されてもいいと思っている。

02 ソーシャルデザイナー「競争から共生へ」社会の中で、共有するデザイン

デザインって、作られるものではなく、生まれてくるものだと思う。だからまずデザインが生まれる土壌や、環境、畑を作ることが必要になる。ソーシャルデザイナーという言い方があって、例えばアメリカでは、今日行くパーティーの内容やどんな人たちの集まりかというTPOに合わせて、アクセサリやドレスをコーディネートすることをソーシャルデザイナーと呼んでいる。それは明らかに、ヒトに対しての自分自身の意識の表現であり、場の共有から生まれて

くるデザインだと思う。それをもう少し発展させ考えていくと、公共の場や社会の中で、さまざまな人たちが、障害や格差、言語や人種を越え、共有するためのデザインが必要になってくる。まだまだこの分野のデザインは未開発で、環境デザインとかユニバーサルデザインの中でなんとなく収まっている感じがするけれど、でももっと独立したかたちで、社会に貢献できるデザインとして力を発揮できるのではと思っている。

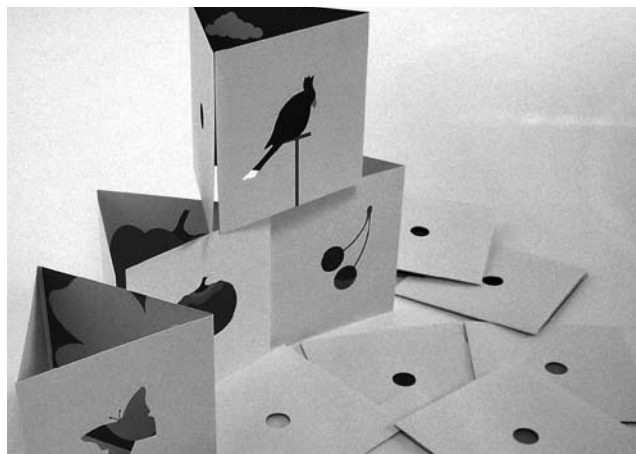
03 経験を共有するものとして生まれてきた絵本

私が絵本を作り始めたのは自分に子どもができてから。絵本は、自分にとっては「道具」みたいなもの。生後まもない、まだ言葉が分からない子どもと向き合いながら、何か共有するモノを作りたい、と思って生まれてきたものだから、あくまでもプライベートなものだった。出版をしてみても、書店の人達は「とても売りづらい」とか「難しい」とか色々あった。多分その通りだと思う。…ただもう少し、本を、子どもと一緒に共有するという、そのための道具としてとらえてもらえると、分かってもらえるのかも。

04 ワークショップで共有できるもの

色々な場所へ行き、色々な人たちとワークショップをしてきて—去年はメキシコにも行き、ニューヨークやヨーロッパもずっとまわってきて、耳が聞こえない子ども達や目が見えない子ども達とも。そんな経験から日本の教育環境を見ると、行き過ぎた管理教育には疑問を持っている。管理する側の人達にとって、同じような子どもを集めて、同じレベルで教育するのは、ある意味とても管理しやすいこと。誰しも同じレベルからスタートすれば、皆同じように成長していくと思えるから。でも実は、違うように成長していく子ども達がいる、むしろ子ども達にとって、お互いをどう理解し、どうコミュニケーションするのかという、つまりコミュニケーション能力が、実は社会に出た時にも、とても重要になってくる。

昨年メキシコでの、教育文化省からのオファーでワークショップをした時のこと。午前中にプライベート（私立）スクールに行くのと、とてもリッチな環境で、リゾート地みたいな森の中に校舎が建てられていた。もうひとつのプライベートスクールは、外国資本が入り、子ども達はフランス語を学んでいた。校舎も施設もどちらも立派



だった。こういう学校に通うのは、お金持ちの子ども達ばかり。その日の午後にパブリック（公立）スクールに行くと、校舎はもう比べ物にならないくらい貧しくグラウンドも狭い。生徒たちは貧しい階層の子ども達。たった一日の経験だったけど、メキシコの格差社会を目の当たりにしたような思い。そこで教育文化省の人達に話したのは、ほかに第三の場所を作り、そこにそれぞれの子ども達が集って、共有するワークショップはできないだろうか提案した。とても共感してくれて、今、そのプロジェクトを年内の開催に向けて進めている。

視覚障害者の人達とも同じスタンス。晴眼者の人達と一緒にワークショップをする。そうすると、視覚障害者の人達にとっては、目が見える人達と共有する経験がほとんど無いので、色々な刺激があり、お互いを理解し興味を持つようになる。ところが、社会の中でそれが分断されていると、まったくそうした経験がうまれてこない。子どもの社会性をどう育むかを考えた時、同じような人たちと同じような会話、同じような目標を持つことじゃなくて、むしろ違う人達をどのように理解したり、あるいは経験を共有したりという、こうした社会性を育むことが重要だと思っている。やがて日本も、ヨーロッパのように外国人を受け入れる環境になってくると思うから。今の日本の教育の中ではどうしても難しいことなのかも、ならば我々民間が…ね。ワークショップって展示をするのと違って、そんなにたくさんのお金がかかるわけではないし、とてもローコストで運営できる。プログラムもブラクティカルに精練していけば、とてもいいプログラムになるしね。こうしたプログラムの開発も、ソーシャルデザインの中に組み込まれていくべきではと思っている。

05 デザインが生まれる時

毎年春に開催されるポローニャ国際児童図書展では、若いイラストレーター達が作品を持って見せにくるんだけど、でも結構自分の中だけで作っている人達が多くてね。共有することを実際に経験していないわけ。自分の机の上で作ったものを誇らしげに見せるんじゃなくて、現場に入って現場の中で生まれてくることを経験していかない限りは、モノってなかなか共有されないよね。作る現場にしても、アイデアが生まれてくる現場にしても。

去年の12月にフランスのエクサンプロヴァンスで、街の大きな図書館での私の展覧会があった。図書館の企画で、市内にある美術大学で、私が学生たちをトレーニングし、本を作るプロジェクトを実践してほしい、という依頼。展示が12月から始まるので、その2か月前の10月にプロヴァンスに行き、学生達と一週間、朝から晩まで向き合った。最初の日に、全校生に向けての講演があり、私の本づくりについて話をした。その学校は、いわゆるファインアートの学校つまり、芸術学校ね。デザインの学科はないわけ。折しも校長先生が私の本を評価していて、このプロジェクトがスタートした。ところがほかの先生たちが真っ先に私に言ってきたのは、ここはアートの学校だから、生徒たちにパーソナルな制作つまり、自分自身の制作に対しては評価するけど、ほかの人のために作られたものは評価はしないと。本を作るというのは、私にとっては共有目的で作るわけだから、全く否定されちゃったんだよね、最初の日

に。その晩、どうしようかな…、とあって。

でも自分ができることをやるしかないと思って、二日目からの、クラスに集まってきた20数名の学生達といろいろワークショップを進める中で、「サプライズを作る」ことを提案し「私を驚かすものを作ってください」と。「サプライズを考えて」と言うと、皆、紙と向き合いながら切ったり折ったりして構造を考え始めた。何度も何度も繰り返した。三日間、皆、集中した。そうすると、学生達の意識が変わってきたんだよね。サプライズを作るというのは、つまり対象が必要なわけ。自分のためじゃなくて誰かのために。五日間のワークショップが終わり、学生達は本格的に自分達の本を作りはじめた。学生たちの作品が展示される会場は、図書館の中の児童書コーナー。当然のことながら子どもに向けた本が期待されている。でも私は学生達に、別に子どものために本を作らなくてもいいと言った。むしろ、子どものためと言いながら、大人の思い込みだけで本を作っている人達の目を、開けさせるようなものを作ってください、と。でも、やっぱり子ども達には、理解するために渡る「橋」のようなものが必要だから、橋のようなブリッジになる機能を必ず構造の中に入れてください、と。そうしたら、それから2ヶ月後の展示までに、学生達から本当にいい作品が生まれてきて、先生方も驚いていた。

06 経験としての絵本

本の機能は、大きく三つに分けられると思う。一つ目は、いろいろな情報を載せ「情報ツールとしての本」。二つ目は、何かする時に参考になるような資料としての「アーカイブ」。これらのことは、今までは紙のメディアでできてきたことだけど、これからはインターネットとか、電子ブックとかにどんどん代わっていく。最後の三つ目は、「経験」だと思っている。例えば夏目漱石の「坊ちゃん」をそれぞれのヒトが読んだとしても、頭の中に描かれる坊ちゃん像は皆違う。それは、自分の中の、今まで見てきた色々な記憶や経験から、ある種の疑似体験をしているわけ。つまり想像するという「経験」。

絵本ってすべて描かれているわけじゃない。すべてを描こうとすると絵も言葉も、もっと説明的に描写しないといけなくなる。かなりの部分が抜け落ちているわけね。その、あえて欠落されている部



分を子ども達が自分なりの想像で埋めたりすることで、それが経験になってくる。経験は、自分の五感を全開にする事で得られ、目や耳を使い、匂いをかいだり声を出したり。子どもにとって、お母さんが、絵本を読み聞かせてくれるのを聞きながら、同時に経験を共有していることにもなっている。経験は嘘をつかない。だからいつまでも記憶に残されていく。とても大事なことだと思う。

07 Book is a process.



ボローニャで、たくさんの出版社が来ている中で、小さな出版社がブースを作っているのが「SMALL WORLD」。インドのTARAという出版社や、メキシコのPETRA、我々ONE STROKEにバリのレトワゾー。みんな小さな出版社。でも、色んな意味で良質なモノ作りを目指している、その地盤になれればいいなあ、と。そこで、ブックフェアが終わった最終日に共通のメッセージを出しましょうということになり、生まれてきたメッセージが「Book is a process, not a product.」。プロセスって経験そのものだよな。経験がそこに伴わなければ、プロセスなんてあり得ないわけだから。やっぱり本って、生まれてくるまでの色々なプロセスとか、それを背景とした色々な経験が、本として生まれてくるのであって、商品としてだけ考えていった時に、案外別なものになっているんじゃないかなあ。

08 作品を見ながら

自分の子どもが生まれた時、ちょうど日曜日で出産の立ち会いができた。その時、へその緒を初めて見たんだよな。不思議なものだった。そのへその緒を本にしてみたいと思うようになり、図書館に通って色々調べたの。そしたら目からうろこの発見があった。へその緒はお母さんと胎児をつなぐ大事なパイプ。栄養がお母さんから赤ちゃんに送られ、そして出産が近くなると陣痛がはじまる。陣痛って、出産のために力を出すためのもの、つまり痛みがあるから頑張れる、みたいな。そしてその、陣痛は、実は赤ちゃんのほうで、それを引き起こすホルモンが作られて、そのホルモンがへその緒を通してお母さんに伝わっていく。つまり赤ちゃんから、「もう、産

まれる準備OKだよ！」というサインを出しているんだよな。それを知った時、子どもってとても積極的に生まれようとしているし、おそらく産まれてからも同じように生きることにも積極的なんだろうなって思ってた。そして、この本(『ぼく、うまれるよ』ONE STROKE 1995)が出版された。大人は色々子どもに与えようと一生懸命になりすぎてしまい、子どもからのサインを案外見落としてしまっていることも。もし上手にきっかけのようなものを渡していけば、そこから子ども達は自分で何かに興味を持ち始める。好奇心って、生きる力になっていると思う。

この本は(『FIRST LOOK』偕成社 1990)、子どもが反応する形って、丸い形かなと思って。瞳も、おっぱいも丸いじゃない? そういう丸い形に、子どもが反応する何か本能のような刷り込みがあるんじゃないかと。だから最初に作ったものが黒い丸のカード。生後3か月の頃、まだ視力が弱いから、コントラストの強い色に反応することなど、100以上作った試作の中から見つけたんだよな。大きさも、あまり大きくし過ぎると驚いちゃうし、手のひらサイズくらいにしてね。最初は、こういうカードを手作りで作っては見せて、娘がちゃんと見えているか、という確認をしたかった。そのうちに娘と一緒に経験することで、お互いの中に共有関係が生まれてきた。だからコミュニケーションって、お互いの共有意識が大切なんだって、子どもとのやり取りから学べたこと。

これ(『WHAT COLOR?』偕成社 1991)は、子どもが1歳を過ぎた頃かな、散歩に連れて「葉っぱ」という言葉を教えたの。葉っぱを持たせて「葉っぱ」と伝えた。子どもは「はっぱ」と答えた。次の日に今度は色の名前を教えようと思って、「緑」って言ったの。そうしたら「みどり」って言うようになった。しばらくたって散歩に出ると、子どもが葉っぱを指さして「みどり、みどり」ところが、指差した先にあったのは黄色の葉っぱだった。モノの名前と色の名前を混同しちゃったみたい。それで、もう少し楽しく、子どもが分かるようなものができたらと思い作ったのがこれらのカード。(頁をめくりながら)赤い丸が…赤いサクランボになって…リンゴになる、とかね。オレンジが…柿になる。白は難しかったんだけど、うさぎになって…白い雪にうさぎの足跡が残っている。青い鳥が…青い空に飛んでっちゃう。こんな風にして、色の名前とモノの名前が分かるようにね。それは子どもと向き合いながら生まれてきたこと—今は子どもも大きくなっちゃってそういう環境にないから、なかなか生まれてこない(笑)。

これ、こんな風に書店で売っていると、パッケージにも入っているし、お客さんが出したら元に戻さないじゃない。だから書店では不評だった。昔、ニューヨークで仕事していた時があってね、もう今から27年前。CBSというテレビ会社のデザイン部門で仕事していたの。CBSの斜め向かいにMOMA(ニューヨーク近代美術館)があった。そのミュージアムショップにほとんど毎日のように仕事帰りに寄ってはね、こういうところに自分が作ったものが置かれたらいいなあ、って思っていた。出版した本があまりにも日本の書店で不評だったから、自分でMOMAに持って行った。1990年かな。そうしたら、MOMAのバイヤーの人達とかいろんな人達がとても興味を持ってくれて、その年のクリスマスに、これらのシ

リースがウィンドウに大々的に飾られた。それをパリから来ていた図書館司書の人が見つめて、そこからいろいろなやりとりが始まり、1994年にフランスでの、初めての、私の展覧会が開催されるまでに至った。

これ(『空が青いと海も青い。』ONE STROKE 1995)はね、本って、開く方向がいつも同じじゃない? こう開けばずっと同じ方向。子どもと向き合っていると、いつも子どもを驚かせたかったわけ。これね、ほら、こうでしょう? こうなる。(様々な方向に本を展開させながら)もうこれだけで、ええ~!? みたいな、ね。(笑) こう見ていくと「空が青いと海も青い。どうして?」って質問がある。下の方にちっちゃくその答えが書いてあってね、「緑の葉っぱはどうして?」って質問には、ほらここにその答えが書いてあるわけ。これをこんな風にひっくり返すと、ほら、秋になると葉っぱの色って黄色になるじゃない? だから絶えずページをこんな風にしながら見せていく。でも、大人達はさ、これをどう見ていいかわからないというヒトもいてね? まあ…、確かにそうだよなあ(笑)。

これ(『雲ひとつ』ONE STROKE 2007)は、本って固定されたもの、と普通は思うじゃない? 要するに、変えられない。でも、この本では、一切のイラストレーションとかイメージを排除して、紙と型抜きだけで雲を表現した。一応、テキストはあるんだけど、「雨が降る日もある」「穏やかな日もある」…「今日だけの今日の雲、明日は明日の雲になる」…。この本を作った時は、例えば誰かがこの余白に色々書き込んでもいいな、と思ったの。つまり固定されたものじゃなくて、その人によって本が変わってしまう。それで、雲を選んだのは、曇ってずっと動き、変化し続けるじゃない? 一度たりとも固定していないからね。

これ(『折ってひらいて』ONE STROKE)は、視覚障害者に向けての本。ここをこう引っ張ると大きくなる。心臓の動きを、目が見えない人たちに伝えることを想像した時に…心臓って形が大きくなったり小さくなったりするじゃない。それを、目が見えない人たちが触手で分かるように、という事で作ったもの。

これは(『Little tree』ONE STROKE 2010)、今年ポローニャで受賞した本。4年ほど前に、九州大学病院の仕事をしていた時、水田病院長から聞いた話がずっと頭に残っていて。水田先生は小児外科医で、ずっと長い間、末期ガンの子どものか、白血病の子どものか、「死」と向き合う子ども達と接してきた方なんだけど、ある時期になると、子どもに「死」というものを伝えなくちゃいけない。そのことを、宗教的に伝えるんじゃないで、もっと普通に、私達が「死」というものを理解できるようなことと同じように、そんな絵本はないだろうか、と。もちろん、この本で解決できたとは思わないんだけど。私の叔父が、脳梗塞で倒れて以来ずっと長い間、無意識のまま入院していて、最後に亡くなってしまった時、そういえば水田病院長に「死」について言われていたな、と思い作り始めたのがこの本。タイトルどおり、小さな木が成長していく話。もちろんテキストもあるんだけど、木が成長して、葉っぱが紅くなった

り、天気が良くない日もあるし、冬には葉っぱが枯れ、クリスマスにはこんな風にイルミネーションが枝を彩り、また冬が来て、最後に木が無くなっちゃう。でもまたどこかで新しい命が発芽するという話。この本を、ある時、目が見えない視覚障害者の人に触手してもらったの。そしたらね、彼女がこうやって…こう…こういう風に、触手する。その様子を見た時、その行為がとても優しく美しく見えた。我々目が見える人間って、えらい乱暴だな、と思った。子どもは特にそういう時期があるよね。モノを乱暴に扱う時期がね。でも、モノに対して敬意を払うというか、慈しむことを伝えることができるならば、もっと感謝もするし、愛情も持てる。今、どんどん使い捨てになってしまい、モノに対して乱暴になってきているよね。この本は、子どもばかりでなく、大人にも向けたもの。モノに対しての慈しむ行為とか優しい心を、目が見えない人達に教えられた。モノ以上に、ヒトに対しても同じだよな。



09 これからのこと

もちろんもっと仕事したいし、役に立ちたいという思いがあって。でも数えると、今年57になってね、半分以上生きたよね。だから元気なうちに、むしろ若い人達と接して、若い人達が出版に対してのモチベーションを持てるような、そんな活動をしていきたいと思っている。でも今、出版不況と呼ばれていて、すごく難しい。それには幾つか色んな理由があるんだけど。加えて電子ブックもあるよね。デジタル出版って紙を使ってる加工を必要としないから、そうすると出版ってコンテンツをつくるだけの作業になっちゃうんだよね。それは我々が本から受けた感動とは違ったものになってしまい、どうしても、出版へのモチベーションが上がらない。モチベーションが上がらなければ、若い人達はそこに向かって何かをしようと努力しないよね。むしろネットでのお金もうけを考えるかも。だから、本のこれからの形、というか、出版そのものの方向性を未来に向けて示せるような、そういう行動をとる責任があると思っている。我々が諸先輩から受け取ってきた財産ってあるわけね。今度はそのバトンを次の世代に渡す時。その時いっしょに大事なものを引き渡していきたい。それが、私はモチベーションだと思っている。憧れにも似た…。出版そのものに抱くモチベーションが持てないと若い人達もつまらなくなる。だからもっと驚きのある面白い本を作りたいと思うし、もう一方で、若い人達とモチベーションを共有できるようなことをしてみたい。

最近自分の中である方向性が見えてきて。例えばこれ一冊 7000 円するの。これは 9000 円。高いでしょう。ポローニャで受賞してブースにこの「Little tree」を出していたら、持って行った本全部、120 冊売れちゃった一色んな出版社からオファーがあって、ブラジルとかスペインとかね。全部カウントするとすごい数になる。ところがこれ、一か月に、50 から 100 冊位のペースでしか作れないわけ。

何となくイメージとしてあるのは、一方でアーティストブックと呼ばれる分野があって、いわゆるエディションナンバーの本。今はオンデマンドという印刷システムもあるし、コンピューターがツールとして便利に使えるから一まず本を小部数作り、次にそれを世界のステージに持って行き、世界の出版社と共同制作をする。

チャンスとして考えられるのは、一最初から部数を多くして、コストダウンを図り、ある程度広く展開できるような流通システムにのせる考えは、もう難しくなってきたいてね。数を多く作ることで、ひとつには原価を下げることに、もう一つには、本との出会いをつくるため。例えばこの本がいいなと思う人は 10 人の中に 1 人か 2 人も。でも、そういう人達と出会うためには露出されないとなかなか出会えない。それが、今までの流通の仕方。でも、今インターネットがあるから、出会い方も少し変わってくると思う。これからは今まで以上に、原価を下げる工夫はなかなか難しいかも…。でも現実的に売れなくなった本はどうなってるかという、結構出版社が断裁してしまっているわけ。在庫にも税金がかっちゃうからね。でももうそんなことは出来ないよ。資源の枯渇を考えるとね。

だからちゃんと紙で作ったものはある程度残すことを考えていかなくちゃいけない。無駄な部数を作って、流通でひろげて、そのために安くすることじゃなくて、最初は 7000 円、ごめんさい。でも欲しい人がいたら、どうぞ。そしてそれが増えてきて、もっと多くの人に渡したい、となった時に、今度は世界に行けば、ヨーロッパ、アメリカ、中南米など、世界の人達と共同出資的な出版が進められ、ある程度の部数ができる。そうすると、日本の技術を活かしながら、時に中国とも連動し…という風に方法を変えていくとかなりの部数も作れるし、コストダウンも図れる。つまり二次使用を目的とした出版を考えていくと、そこにチャンスがあると思う。最初の、一次使用のプロトタイプ的な小部数の本は、若い人達にとっては逆にチャンス。最初から出版社に持って行って、これどうですかと言うんじゃなくて、自分たちである程度出資して作れる時代。自分の領域をもっと広げたい人がいたら、それは世界に持っていけばいい。ブックフェアもフランクフルト、ポローニャ、グアダハラと色々あるから、世界へ行こうよ、っていう。…そういうわけで、若い人達が元気になってくれるといいなと思っている…けど、そうでもなかったかな？(笑)

【インタビュー後記】

一見「美しいデザイン」が印象的な駒形先生の本だが、お話を伺ってみると、むしろ人間臭い、熱い想いが伝わってきて驚いた。お話の中で「本をつくるのは、わたしにとっては共有目的」とおっしゃっ

たが、その言葉に納得させられた。デザインのためのデザインではなく、絵本のための絵本ではなく、人と人が空間や時間を共有できるようにという創作への強い思いをかんじさせられた。

(武蔵野美術大学大学院 芸術文化政策コース 2年 梅村祐子)

色々な国の子ども達や、目や耳にハンディキャップを持った子ども達と、ワークショップを通じてコミュニケーションしていらっしやる駒形先生のお話をお聞きして、自分だったら、子ども達とどんな共有体験ができるだろうか、と考えるようになりました。教育現場に限らず、社会で人と関わっていく中での共有体験の重要性を教えていただきました。

(東京学芸大学 初等美術選修 2年 富塚裕佳子)

最初、駒形先生の絵本を見た時は「うん？これって本？」と思いました。平面的ではなく、手で触りながら楽しめる立体感に驚きました。今回の先生のお話の中で、一番心に残ったことは、今の時代では、生産者(作家、デザイナー)、消費者(読み手、人々)、分解者(研究、学者)、これら三つのグループの循環が、だんだん早まってくるのではないかと、ということですね。あ、私は何になれるかな、と考えさせられました。

(武蔵野美術大学大学院 芸術文化政策コース 1年 パク・ヒジュ)



【駒形克己さん ワークショップ体験記】

駒形克己さんのワークショップ、「タクタイル～触れて広がる紙の世界～」は、スパイラルマーケット青山店にて行われました。店内にきちんと並べられた 温もりあふれる雑貨に囲まれて、ワークショップは始まりました。

このワークショップの目的は、「学習すること」です。数学的な法則、人から習うということの大切さ、わたしたちがイメージをどうとらえているか。五感をめいっぱい働かせ、作品をつくることをとおして、駒形さんはたくさんのお話を教えて下さいました。

始めに、わたしたちは目隠しをして紙の彫刻を作ると伝えられました。それをあるルールに基づいて進めていきます。制作は目隠しをして行い、紙は必ず 3 回折って 1 カ所を切る、というルールです。紙の彫刻を作るために、最初は白い紙を使って練習をしました。まずは、駒形さんから指示されたとおりに折り、切る作業をします。

そして、切り抜かれた図形がどのようなものかをひとりひとり推測していきます。始めはさっぱり検討がつかず、予想していた図形とできた図形がまったく違っていただけに驚き、思わず「あっ」と声を上げてしまいました。

わたしたちの驚く声と楽しげに笑う声を聞きつけて、店内で買い物をしてきたお客さんが集まってきます。たくさんの方が興味深そうに眺める中、ワークショップは進んでいきます。

練習を2回ほどくり返したあと、切り抜かれた図形が実は数学的な法則の上に成り立っていることを知らされます。「ふたつに折るのを3回くり返すから、 $2 \times 2 \times 2 = 2$ の3乗=8でしょ。だから、切り抜かれた三角形の数は必ず8つになる」と言って、駒形さんは実際に紙を切って説明して下さいました。わたしたちは「すごい！」と目をまるくして見ていました。

練習してきたことを基に、今度は自分のイメージしたとおりに図形を切り抜くという制作に入ります。イメージした図形を作るには、どう折ってどう切ればよいかを考えながら作業をします。完成したら、ひとりひとり何をイメージして作ったのかを発表していきます。こういったことをくり返して、紙の彫刻を作るための勉強をします。

自分のイメージに沿った作品が作れるようになったら、次は他の人の作品をまねて作るということをしました。もちろん目隠しをしたままなので、触覚だけをたよりに他の人が作った作品を頭に描いてゆきます。「かなり苦勞しているようだね」と、駒形さんは微笑みながらみんなを見守っていました。

みんなの作業が終わったころ、駒形さんは「みんなどれくらい当たっている自信があるかな。目隠しをとって確認してごらん」と呼びかけました。すると、ほとんど同じものを作ることが出来た人もいれば、まったく違うものになってしまって「難しかった」と笑っている人もいました。この作業を通じて、駒形さんは人に習うことの大切さ、そして「習う」という行為には、さまざまな方法があることを教えて下さいました。

ふたつのことを「学習」したら、いよいよ本番です。駒形さんの手元には、鮮やかな色画用紙が用意され、準備が整いました。「これからみなさんには、紙の彫刻を作ってもらいます。配られた画用紙の色からイメージするものを彫刻にして下さい」と、駒形さんから説明を受け、わたしたちは「いよいよだ」と顔を見合わせました。まずは、自分に何色が配られたかを確認し、目隠しをして制作をします。わたしは、緑色を受け取り、その色から葉の生い茂った木をイメージしました。イメージにちゃんと合うように、手順を頭の中で組み立て、触覚を使い制作していきます。目隠しをしていると、聴覚や触覚など、視覚以外の五感がはたらくので、今までに体験したことのない感覚を知りました。そして、ふだんよりもっと音に敏感になるので、流れていた音楽から作品のイメージがわいてきたこともありました。

目隠しをはずす前に、駒形さんはひとりひとりに何をイメージして作ったのかを聞いてゆきました。それぞれの発表を丁寧に聞いてくださった駒形さんは、ときおり、「うん。ちゃんとイメージしたものが伝わってくるよ」と励まして下さいました。目隠しをとって自分の作品を見ると、頭の中で描いていたものとほとんど同じに出

来上がっていて、びっくりしました。駒形さんは、わたしたちが知らない間にそのすべを教えてくださいました。この制作を2回ほどくり返したあと、「さあ、いよいよ最後の制作です。最後だから、みなさんにとっても期待していますよ」と駒形さんはみんなに微笑みかけます。今度は、目隠しをしてから、画用紙が配られるので、何色を受け取ったのかわかりません。自分で何色をもらったのかを想像して、その色のイメージを彫刻にします。

みんなの制作が終わり、駒形さんはさきほどと同じようにひとりずつ何をイメージしたのかを聞いてゆきました。わたしは、「青を受け取って、魚が泳いでいるイメージで作りました」と答えました。発表がひととおり終わると、駒形さんは「さあ、目隠しをとってみてください」と呼びかけます。わたしたちは目隠しをはずすと、「あっ」とふたたび声を上げました。配られていた画用紙は、わたしたちの想像をくつがえすものでした。駒形さんは、驚いて自分の作品を見つめるわたしたちに言いました。「みんなはイメージというものにしばられてしまっているところがあるんだよ。だから、イメージを決めつけてしまわないで、もっと幅広く考えていくことが大事なんだ」

この制作を通じて、わたしたちがイメージをどれだけ決めつけてしまっているかを知りました。わたしは息をのんで駒形さんのお話を聞いていましたが、このワークショップで学んだことの大切さを実感しました。

駒形さんのワークショップでは、参加した人全員がお互いに関わり合い楽しむことができ、さらに生きていく上で忘れてはいけない大事なことを学ぶことができます。駒形さんにたくさんのお話を学べて、参加者のみなさんととても充実した時間を過ごせて、本当に嬉しい一日でした。

(武蔵野美術大学 芸術文化学科 1年 濱田夏実)

